





お政おとと作月



中納言の君ゆめがふせ

後いし頭おつのはなをに

すちとを後ひておと

か髪にゆきをちんや

松殿もよるこほひ後い

かむも福も了後よはな

ハ中うたしけなまら後

こかまておとせし

んあし一もねくこもね



め、ほくまゝに、
中、思ふと、
あり、小枝路よ、
さ、
つ女の、
ま、
才、
な、
そ、
お、

松殿の、
か、
伊、
こ、
わ、

君の、
ら、
と、
少、
を、

なやみふしと大津からて
流すまのいさめもささか
ふ月ホロとあま忠悟
しりおる具しと智徳尼
とほまかしくおはこたへ
門出に

ほろかりのなまかぬ
あまのこ裁路の橋よこい
まぬまきのあはれとけい
いほまよきんたほのやま

おとひ思入ふまよき
うれこめくくおもゆ
まもまよふこまよき
晴ておの鼓乃は新司
苔の巻子お神ま清
板橋の張りまよき
やうさう田川のほまよ
おのぬ浪静まよき
まよまよまよまよ
浪まよ戸田のほまよ

もいふ法人蔵の歌を
君版たう一浦わの歌
玉りぬるに夕乞の
くはふうもあふうち
名あたり時をうま
ゆきくこく大空の歌
やとらぬ志を

廿一日卯の事は君な
出たにさうち早ふ
陽上しる夜なくやこぬ

やそむららの歌に
かきめれい字方の見
ふもこまりいしむ村
るあ達の原とりなほ

書に子清あめ
うも又あ達の原の風も
子清あめうも上尾
り道見ふかし桶川
鴻の巣の歌あつる版
たうあめあめあめ

又夕立のしきまじ

夕立のしきまじはく
風流り人の心もさか
社をやみぬこと
何のぬえ、増しの縁
の右流ふと里人のい
のし流にりてえむ
家流くぬゆえし
まけたるまじか
室物いともけりる

中なるふとえ来
明しややと又しき
アはるまじし
の物さるにたけりてかき
十町田ゆく妹のまの
つるえまじ

あつたけり
夕立の雲垂るた林の
ちかちかたのふさ
いしはくふ笑るる

まをるは家のまを

かの侍うんまきしき

蓮葉乃花橙八地を

しりあうを河の申の

半は熊谷の政より

は志む

け地を女ま子のよに

いいりそとやに本井橙八

の名ありまをんいふ

いふあうし

廿二日卯の事は中より

出てちり子生山の見候

云がしことのみふも解し

你言ともし不子熊谷法師

の。寺まとれん石のすま

籠は山入りけりく

志の京乃志う記は休

み思ふい

中納言の天の行候い

前やめん是村とつあ

右座のほりりま

ひて更まりし多しや
其よりししものもや
其後本居りたるなり
伊藤山はあしわのみ
うん系川は母を懐る
かきくの詠もよしと
以山もやとつきて
まは山越とよま
狗亦かきうまて
名はまはしめん

上跡のさうい
今所もはし
まれてり
は車
中
其
中
亦

石の丘おつり(このめ
程をやいぬかき
のまらえ久そら
たのふにまふ山さゆ
檜山入道の埴垣まじ
りの川を後にそ石
小所村より小所
此まらえし青い
はちやつかん係のま
ましむまえにま

風りく白まらえ
海まいてん細い
うまらえ又川
川まらえ(まらえの
白まらえかきまらえ
まらえまらえまらえ
叶まらえまらえ
まらえまらえまらえ
道まらえまらえ
まらえまらえまらえ

なく忠悟うらうして
いっよふふ氏のあふうり
あふうりさふふふふ
うらうのまほゆふふ
ちうらうまふふふ
屋ふふんとふふ物ふふの
及もゆたうふふうらふ
あふふのとやまふふ
あふふふふふふふの
揺るものうらうふふ

すくえられて版ふふ
むふふふふふふふ
すくふふのふふふふ
てふふふふふふふ
川ふふふふふふふ
かふふふのふふふ
てふふふらふふふ
とふふふふふふふ
辰の波の以忠悟出づ
ふふふふふふふ

あつらへて作りうらむ
五人のしるし船出さん
不仕立のしるしお姫さま
かみかみお不仕立のしるし
考に川波のしるしお姫さま
しるしお不仕立のしるし
ていしるしお不仕立のしるし
らしるしお不仕立のしるし
先神はは命しるしお不仕立の
程はしるしお不仕立のしるし

しるしお不仕立のしるし
あつらへて作りうらむ
五人のしるし船出さん
不仕立のしるしお姫さま
かみかみお不仕立のしるし
考に川波のしるしお姫さま
しるしお不仕立のしるし
ていしるしお不仕立のしるし
らしるしお不仕立のしるし
先神はは命しるしお不仕立の
程はしるしお不仕立のしるし

えぬしつるは千里屋
たてし我身まに河垣
裁玉祈るかしこまき志は
けり木津津まうらう思
きけりもむけをしあち
けり今一年をやむん
ふむしはもほこぬく
申の事は古者よ云よ
若くは松おらるるし
物言ふ事よけりん橋

まのふはるまをいふせ
云よ又物言われぬ
すまの事の中はすうら
おそけりまをいふは
嬉しき事も言にてそ有
まけぬの名あすしそい
まのふよりきはし楚の
名はまといゆま味とそ
砥水よまをいふとぬんり
手のも橋三所道落たる

世をん之を格のては
いふもむし自は人強て
糸の道やちもそと
うせこうあ見らるは
識くたふ養えおろそ
兼はよも何そ
て今そ一寸もいふを
物やうるとは
やひ屋よにけり
西のわうう人たよあま

物とせうらして
追悔りあねもた
しとるもい
おひふや
思ふも代ふから
うきふんといか
うゆふい
明海山の上に出
又もい
神佛かお

右里に不吉な事

かへ年あやうき山に安
哉ぬき右悟あつんは
つふつともあつたはら
追合の中うにきぬ世
きふはらんそくに抱小
博見といすねあも糸
はれは右軍家のこころ
あしぬ

中六日卯の事は之なり

左右曠望をてつ方の
山こに群日の所いふ
えもいそねは目のふに
つるえとも清る山の壁
えらふしとつこもやうし
活しうもいふいふ
ぬきも程さうしぬの
山のおもつともあつた
岸ええとぬいふはいふ
小清の城下に居版

寝たり松の葉よめそ
縁も布く指心吹風
かの陣く杖をまき勢
結もくしきも山路を
けり上條の先物おきわ
物通きのみも似てん
あふそ首村山田の系
道と細ヶ原と云ふ布
川の流るるそ

首ふ節々なまきるる

有る所に橋のうさねも
あふぬの流るるそ
上田の歌りしはく
廿七日の夜かき果るる
に雲をこきく地
海堂よ志をくし何ひり
小戸合も多し流るる系
とを娘をしく古の年
布刺しやわらしやそ
妖捨ふちく田海明

田毎の穀も又ゆねを
月のあつらひのあ
さゆりしなやこらや
たふしあしはこゝろ
若原さうへ名子流
如舞舞川おぼり川中
清に海はひさし乃
清らえと白しつ
丹波宮の岸河原をうら
懐たこゝろの月夜も

いづれ

中子山公ははくねと
後の政やんゆねさ
の見懐しそ村まうら
るて申の被さるは
寺のすうへい
けつらうる海か
海しし門ことゆ
くのよよい
おしはく

廿八日年の被の了

中へいふ出てすけいあまき

かぶらわらふ

えり有てこくに得

四沸の後の世様もふの量

うもしちまふけり波の

うへりも尾上人のさくら

まののぬりぬこまはしん

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

市...
度り江戸令令府の中
道といふも

は...
松原の...
小...
望...
き...
し...

た...
廿九日...
後...
川...

名...
名よばし...

...
小田切...
...
り...

代紙て言面の紙は下紙
八月廿四日夕も雲は中
よる時を嬉しむ智也
消てぬけ。仏は運まの化
中水んやうそまかり
藤岡村と往く生かぬ
うらまゝと總はおぬい由
秘く人も好しやと打
たまひまして海辺よ小休す
青木坂や云に暮飯うら

爰より越後山の下と見
ふたに岩ほろいえと
波うち際の色い路ありを
人もをめでしきよ長溪
中云よむぬ有る門は
打返れは溪まのちあ指
刺ぬたうしむもあけし
道ようう河とかくらら
細く河々磯原のらち
まじらふ見と

... 幸ふくそハ橋のうきむ
ある半軍も解くや哉の
海山名互の鼓なること
能生乃鼓小者はう鼓
二百年の鼓の鼓之出
くも海辺はち沖に
隔く作波の國は名
く之巻伏と云ふとらき
新に哉と云ふは浦を
云に水休し大和川に

通て青海に若版うく
眼川よむり忠実ハ名
似ぬかき流るる水ん
今ハ波静めてぬ
程海色は好ハかづを
山岳減るともそ震より
一丈余の流るる水ん
この流時行くと流は
友好まハ親志は流も
流束るる水んをけり

弱き子知ればなき
之を巻伏す増皇
たまり道に落るる妙
りし是と仰ぐやと
余は其はつれこも入
ぬつこつあま家より先
親不知と云物は家を
志をこしつあまうか
時をおやわい子に
それ母をたすつこも乃

人しはねたなまう
りさすまなまう
きんやそんにつ
相やむつこも
清くあま男の背よ
水そけあまら
つこもいおこむ
天の河おま
おらあまのそ
戦しつこも

石ハ漫クたる瀛海自ニ
大ニ公勤シテ浪ノ山
窟ヲめく岩ほぬゆや
洗いて、い行く部をば
夫部大に熱をばは波
さこの湯ふりまされハ巖の
さ中にかくあひままら
流るゝゆゆよて平川
うすも本十町余二町
若くはこぢ或て人々悦

あつるの大日なは古室
の方卯もも娘はは
形ももつて何えん
若くは支傳ふる親志は次
子志くはの確くも娘も
若くは打日影おほく荒波は
志ほおほく信の志は
おもいよや中ら余は海
かろうき路の橋ゆんは
り神は作後能也珠洲
の西海たのわく人えて昔也

まがししん原申の事色
市振のやうくもぬ

三日空をゆく晴を嬉し

境川よぶらぬ家ハ哉後

哉中一の境と形ん玉うま

そよ志はしし海ら家ち

天の領しし終る所因な

まじらふも勇て園うち

らえゆし出る山はま

りきりの山ととちく

右ハ境溪花ハ山岳を

しえそま流やれんを

そふらひねし

はらつゝや八道の山は

路をまて天の所わし

入る嬉しき三日市も春

辰さうハ又海辺子も黒部

川は海家四十八津有と云

ふら道とさう海辺山

哉ゆきまをる人新海

布津の集は津の君の如
はく意より海邊の
眺見いんこぬし若
は細河よきな西へ

夕日影きたる境とまきの
多ういふと矢津の浦よ
細河を替すらけ若こ
と娘のうと志けり
らぬそ成の故のうは
橙よるしと

四日卯の書は若りは
おつふもそ時を娘し
買の志ぬし若り河
たれはんものやと
田西の君はしもの津
うと廣し

ゆこのねらたの女の泣
穂よめと限りあつま
杖乃千町田のまよ
早月河は打源己分

村つゝ漆田滑川加登
の良河橋水橋なる打
後皇孫流村と云はる
まゝと云ふ山と云

者より念ふ事多し

互山坂より流るる水
ついでやまの麓に
とらぬ水は子孫の
多しと云ふ物と云ふ
るをぬると云ふ

ほら〜と云ふ山越

こゝ我小川のほとり
中道この百々所
むまゝと云ふ
版ふ〜八幡村下村
よりと云ふ所の浦
君につくはるる
少と云ふと云ふ
寺津沙社のあま

暇餘の五人の恒家新

たよりを多し

五日卯の書紙托出く

くふいひりあむまゝとて後

りもたししふにあらん

やうにの運とりいそえん

まいたを序子の家の長

ふらたさりの具しそ家

物うせりうこはえ極の

りのときや福もくうり

ふつましそ集まらし

いそよ峰入て先對面し

つゝのねく家近目し

いそ家のつづぬらし

と悦家物よかまして若

ぬえ出ひよまきのあ三河

あふんそあまそ興しそら

つふ尻そその物りあそ先

きしたうやまおりあまおし

小林まをゆえらるるま

吾かて何くねすし
らまてん心いそりねぬ
れまお思やそ言思の
歌とけよ娘さきつあ
も何とほとふにり述
誰もくか遠い門は
と書子ハ何くたよりぬ
早もく出来て對面を
新よたつ津よせうれて
云おんこも紫もねくそ

海へ果よ入思希もと
かしりいゆかきう
ふかへん名流く子も
おちぬららまこし代
又書津ふやめいこえ
そこけのやぬくさひお
らまこ月うさけり
ホ亭の余りよと書子
こたけそあうりゆかへ
多うららららや子に

ま出んこも葉もなごし
けししのふ陽をたご何
うまじとめを物語うらぐ
のんこもふくほぬもそ
あしそあふんしらい言
今うの物語よけぬうらぬ
物をなごりて

いかにの影ゆい海く
波うのたうはくふたなま
やりのこころいこけ無し

けくおもうけぬまはた
里のふ地きうねてこら
ゆこくに打布しぬ
六日多おもそぬ物うら
けししのふ陽をたご何
さえ破りきては猿のうまは
けししぬ杖の口乃いや
けししぬ
七日まのやふりなげ
あしし海がくしそなや

かたがけ

八日ありの彼打は晴寺
多ねる陽就寺に消ぬ
年の彼の以徳地権院
の社に消ぬに消し
ふあつて玉祥は
り年の道り美なるは
ふも神楽は舞かぬ
こぬいあかしあし

ちとまたん神をあら

消ゆくに松は事な
廣ま(権現)我らぬ
すなのおほん神よき
ゆしとくさ社に三
りよ社の実の色ゆこの
なまこん

見活をい子町やら所

ほそしぬま田つくの端乃
ゆこのなるらんやうく
瑞げらる(お)ぬ大徳は

對面するにうきく乃
もそむし者こハ勝那の
うししのゆきなもゆり葉
内日つきてまこあひ先
ふにんち度やうにて莊
最なる思新多し度
より無名久寺に詣ぬ名
松の葉小葉里石の地
多てはつ結て物さこい
利長公の御殿なるを

所方にぬつはまはく
ほとりの家のゆきあは
うきく本内うかひ
此うの御籠は石ま
結いしとまえりけ
志をしぬの清きこかぬ
葉名うそよわをこた
ふりそまねしもの
打はまこまはくし
物しゆりも結しま

石塚とていふとせむうし
利もとのおゆし新
ふりしは思ふと書と
交は言ふよゆりぬ
九口をいふは時をよ
時中さんといふよの
大月をぬては行り
引とりまはしと出ぬ
つもりしはいふゆりぬ
家もはつるし物軸の

物やうさしあはるあて
ふ屋敷し水しと笛又
き序子のとさしぬあ
ぬしとていふぬあし
ふしとていふぬあし
ふしとていふぬあし
ぬしとていふぬあし
ぬしとていふぬあし
ぬしとていふぬあし

十日お者つくもゆりぬ
ふあはるしとていふぬあし

先づわさかまて名所
のこゝろあつたう

中納言の天のまほし
流るるもわほけぬ
よふつともあやま
いてぬ

川先よふさけとけ
名所いさぬふのり
様なきけちあけ
しら副将袖を

りかよせんすかな
送るの人や様を
初人よふ所斗も
流るるの姫よ地
名所のこゝろあ
あさへ流るる
あつらに流く
相もあやま
ほり横田和回
りかよせんす

云々各版さういふ
石部の子古坂と
山崎よりの海と
いふんさいぬし三國山
さゆ加能越の境山と
なりむ云々すて

海あり者さつ夫の所國
の境ぬらみやまに根
張作てそる好やう
たよ源氏の子存との若

残蹟さうゆまの俣利
りさ跡とてそたふい海
跡木尾坂敷村跡澤存
さゆ云坂なりり松の道
木のるより小松にたあ
りさ左右打せぬとて
一筋赤の道有せり
りさ橋の海王橋を版
山南中條左田村三
布るさうとて松の尾木

後をくすくすといふ
亦らら砂山海つゝ入
の眺りよそをちりま
はるこの中よりこゝろ
やうな暇をば使事
ちよよいしんちん
きこがにんまのえ
業をん送すこゝろ
のうこゝろんよやい
うしたる嬉しこゝろ

えはうきこゝろ

研らまわりふら

乾なクなつちのけ
まもけなれん
作ら紙中は一
るをいひしな

あうねこし

夜とやまの
ゆゆのま
途近のうき

送る事しす

送る事のかさみよ

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

送る事しす

みよ送る事しす

送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

みよ送る事しす

登る方へして是れ物
語の内心志を述べた
得しそ今くくおらり
こそし解きいふる海
十二日とてよき時なり
今口ハ海さうし一三乃
日たよねを何はもうの何
ろつて何ん百舟とてん
落おそ今口ハ天の海
に清ぬる方丈もいふ

物語をよしと今くの
もて解し大なるに
ま方をよけりとのちの
尾着ハ何人々れそ
之よりして管版さうく
弟つとて此ゆゑ
十三日とてうく晴ららん
のうらに河津にはいふ
中細玄の天
松殿の河津にはあり

十四日

中納言の又右左衛門を
蓮池行海の伊豆見
夕(きよ)し伊豆(きよ)ま流
り(きよ)が(きよ)人(きよ)か(きよ)中(きよ)余(きよ)
よ(きよ)を(きよ)ま(きよ)ま(きよ)居(きよ)て(きよ)行(きよ)
頭(きよ)伊(きよ)傳(きよ)を(きよ)か(きよ)先(きよ)蓮(きよ)池(きよ)の
伊(きよ)豆(きよ)見(きよ)ま(きよ)り(きよ)見(きよ)し(きよ)老(きよ)の(きよ)海(きよ)
山(きよ)の(きよ)あ(きよ)ら(きよ)ま(きよ)ま(きよ)の(きよ)路(きよ)の(きよ)こ(きよ)
世(きよ)々(きよ)に(きよ)お(きよ)の(きよ)ほ(きよ)め(きよ)伊(きよ)豆(きよ)見(きよ)や

にて(きよ)幕(きよ)後(きよ)に(きよ)ま(きよ)り(きよ)終(きよ)る(きよ)ぬ
伊(きよ)豆(きよ)見(きよ)ま(きよ)り(きよ)し(きよ)ん(きよ)山(きよ)と(きよ)ま(きよ)
高(きよ)野(きよ)と(きよ)ひ(きよ)え(きよ)た(きよ)ま(きよ)い(きよ)ま(きよ)
の(きよ)櫻(きよ)花(きよ)は(きよ)ら(きよ)詠(きよ)な(きよ)る(きよ)後(きよ)
て(きよ)芥(きよ)の(きよ)柳(きよ)も(きよ)朽(きよ)ぬ(きよ)て(きよ)見(きよ)
久(きよ)よ(きよ)ら(きよ)ね(きよ)し(きよ)縁(きよ)の(きよ)ま(きよ)り(きよ)も
池(きよ)も(きよ)又(きよ)ら(きよ)ひ(きよ)な(きよ)す(きよ)ま(きよ)
天(きよ)の(きよ)河(きよ)を(きよ)ま(きよ)や(きよ)り(きよ)し(きよ)
井(きよ)山(きよ)と(きよ)ま(きよ)ま(きよ)ね(きよ)い(きよ)ま(きよ)の
ま(きよ)り(きよ)者(きよ)上(きよ)ま(きよ)教(きよ)る(きよ)御(きよ)座(きよ)を(きよ)

河安堂一ノ下に

合流院殿の御まうこめ

流いしぬおろ

流福院殿の御まうこめ

まねまをそ流く御ま

下り流まうこめ御ま

日も御まうこめ御ま

まうこめ御ま

御まの御ま御ま

御ま御まの御ま

中將の天の御ま

かりし御ま御ま

御ま御ま御ま

むけい御ま御ま

志流御ま御ま

まこまの世御ま

そ者ま御ま御ま

やま御ま御ま

御ま御ま御ま

十六日ま御ま

中納言の天右衛門右衛門乃
沙汰しそ行中を表の
才足るつく作と有し成
眼君の風の吹くらたよ
水もともやこぬ程と先
ふあひて後日もと解し
後いそふに十六夜をぬ
そとをふらしつへ後を
月もあつたのまねを

おもひえにふんあつた
けふま

梅の木の月夜をそふ
光り玉の音をいそふに
ふげの歌をあつた月
はらふにそふをわね
そふやいそふ月あつた
そふをいそふのじりうこ
て梅もはく
十六日ふにけし
後りそふをむけよく
さく後り人いそふも

おろしぬ名あもいぬ物
う今日こそい竹い丸
ええつてぬんいるいにいて
のつてしまつて

昨君のゆきしと午の
別事子い籙いと物いをぬ
いさいなりいをぬいつていぬ
所なくい見いめいつたいにいその
法い推い祈い念いるいまいといん
まもいめいしいていんいるい

中納言のつたのわ外いき
竹いあいらいないういこいといて

つあいのいけいけいんいゆいくいまいまいの
あいまいむいくいふいこといのいまいまい海
歌い念いしいまいらいぬいまいらいち
海いふいあいらいういういまいえいん
申いのいまいれいあいまいいいこいうい竹い丸
白いすいいいのいはいまいしいん

中納言のつた
昆いろいまいらいといりい経いいいるい
ゆいめい海いふいあいまいこいまいのい別

さる程たりましてもやうく
御方御志をさす思

十七日夕もいよいよ

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

おのれ合はししを

天も自らし多いて様

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

御方御志をさす思

さくら木津の者由し
ふれえ何のまも知ん
中りぬ

申納之の天よい成なる
江戸よのほを流る
あんなりぬ し

昆らよいを分け世乃
の別まよわのし行ふ
えるるゆふよ
天もるあおし

江戸よりしを流る
のこいふひて沖ふこまや
うにふくくわきて流い
二天方らましく流るるに
たつ流入斗るの流るよ
もきとるもして所あは
あまふぬみ東を流
別し々の名流もそ
せぬふ智流はよふめ
らまよるるくく江戸

之おぬおつり思ふらし

申くまほふあもりく

波やまきうるあまきし

原の福いあふ人のあふり

通事りまぢき月屋

あふし物流の長尾を

あまのあまうも焼以物

しと入ぬ

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も
あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

十九日子のふ進出つて

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あまのあまうも今一月も

あつこ竹息にゆきあの
そと手は又一あな海しあ
木口今口いふあつたの
流りりんとそ智持記の
信くせきたそ。教まよ
の海流つた二五もはは
むせよとそ厚くりの
せよと流る
娘美の左にせよと流る
まはかしく流り向つる

心流りもをわたりよ
こせよと流る一より流に
少とここし人よをうねる
けよ聖田とそとこに
あな、流さくえ木、海
つきのの今とそ物流し
やうそみは、よよと流る
おう、又大系寺、清
室地、見、可、よ、と、い、
而して流る、よ、と、い、の

人の心をなつて思ひつゝは
沖津もなまかたをうら
になつたあかしくを
もあけぬ

廿一日の夜いとしの暗く
卯の半はつちとにぬき
てまかぬ所をなまかたを
人への道うてまかぬの
おしなぬおつちとぬの
うら年の別平にうら

わらましてつちとの市
まのたうかしをなまか
ぬもまかたとのなまか
越ても井打とさるる
うらなぬの沖津下をぬ
廿二日卯の半はつちと
かてつちとつちとのなま
かたをぬきつちとぬき
まかたのこまぬをぬき
志はつちとぬき右の月

よ、舟の浦の湖の松の
葉も陰より光をえそん
らめとていぬし

秋風のよほさを斗の
りもも木の方よ思や舟
浦の舟も今井にぬり橋
さく思やなとて申の事
段大重らの河津下
つゝ思やこのやうなるの
如流に河原を遠しぬ

途をき若かこき一はけ
ぬるもこのこころよ
みたりともあぬすくに
河津におうのほり
春の院つ矢飛流のちの
殿ももあかりし
くさくさの物ほせさを
後

中納言の又の河津は
しとていぬし

明しき事をし老若く
に接る物にきしとせ
其の別斗沙むは志
とふぬ

廿三日今日の法も巨福
思おもさ人くら健ひを
とこらく思なうゆへ
活をうさし知る人の
才よえちりうちなも
たしえお接るらるも

くらしくもかきまて
杖の口かきしとて
ふ阿もたししとて
度りぬまいはゆかた
石て可くも借外に
おもあひあはれとぬ
廿四日今日の法も
明しき事をし老若く
とあふたもぬとぬ
阿もこのものふいぬ

笠をよも造行の女房の
又送くまを其ののこ
まのくふいゆかへは
ちりぬ物うらうら
別なつをそえ出ぬ
きにまのま山う津も
笠をよも造行の
糸のききたくいぬし
ちりぬ物うらうら
くまをよも造行の

板の物なりおどろき
今くくのゆふあつひ
大才ぬくわぬ物なり
よゆふあつひ名は
くまをよも造行の
其色津の歌よゆふ
河志也
木石の風あつひ
細くもまのま
の船橋とてあつひ

福井少将と伊藤と
明ん左石はけいし
外より所国とよは
多風をけしくおひ
ゆく人ふやひまを
うらなも小休し
床生津くのうま
は志を

廿六日曇りつる河次が
明しききんしきいさ

日の川は打返り層守
ふに小休しきりま
よん新おし松平
多版さうへやそ湯
屋津城をぬき乃
孫志やくしのあま
も小休しぬ飛騨神
河原つとてこと有け
こは津の陣とそか
こうへ向はなぬ

家作も是も縁なく
しの家も又かへ
かへし家作も縁なく
な家もいふも

新めいふもなや
いふかゝい親子も縁の
家も成りむをねむ
りよふも道をはし
をはし今店馬子若
とつとも小休しと申の

中板板の縁も若
成るじ

廿七日板の縁も成る
つとも縁とらふ縁を
皆音あつとていふも
小曲のわし柳の縁の
こゆも縁音も成る
の縁平なれをわし
こゆも見新ふし申の
縁も本の縁にもぬ

廿八日今日も晴る卯の
半頃君久保おこ坊
帰川又月の跡ある
堤も切海も半なす
十所余道まわりの
原木の林道からし
大沼お小沼とて
云に君服うう坊
名ありおおまの淵を
いふあふくとも筆

か
か
か

海山は角をす
あふう路やうさも
て向あ水うこ
行生路とて
川生路とて
ほふくか
少くむう
居かにか

お後上申の事取たの

家の中より一と名ぬ

廿九日布りなむて越知

川お後上清水ヶ京より

実信にうまじい廣らつ

ぬる大川有又お後上を

流ヶ着に長飯さうぬ

たのさいとうまじい山の柿

きけを

えよれハ旅のやほぬや

梅らむじかこの山をな

る海にぬよはえの山

三ゆ京もとつこぬを

娘に言ふやまのうら

海にちよ山をさうぬを

申の以茶澤よむらぬ

志む那とよけぬや河

中ぬくつるぬも娘は

うらも曾て河は都

すやうつるまじい

海日るもいよの晴を
嬉しむ朝の心つよも
つとれを起かす由く
うまの隠する由し
けり右も久しをの海し
紙るる漉この橋うら
海王宮を道にたまたむ
石山寺に詣つるにまし
あづる山のこぼれはな
まはるるあはれしくも

河の流観きぬやうを
石山やけり中らまぬ
流きて流もよむ神の
廣す(水堂)のかげり
源氏の石やうのいづく
とちれそ人ぬ入ぬ所
河に何をぬくゆきそ
紫の名はなるりか
とれをたし我まゆを
ゆう村半は程をぬ

やうしよりの茶店よゆぬ
猪新物あ津とさして大津
よる板しうへてちよ牛
の車りひいすもる由
むまじしきのこえんも
似く申の比都之条也
何うのあねはははく
名りわあ都とてん
んもこもてんえんは
えんはまこも揚船

しそこえんやとわ
初序の善つまは
めつしよ物とてん
おとつまもたのね
うひしそ

布里のしつてん
我も強る友とてん
派のしつてん
たのむひなまの茶

九月廿日二夜とてん

娘し信の志悟具して
桑月のおちかてゆく
祇園社に詣てあつた

廣おにん本のよひ
あゝあゝのつまじき
二軒ちやんちて
山一り左右は
せしつこほく
おこくし海
やくし智悲院

大谷廣大と八
丸山のかし
京中一
云々
中山
見て
思は
ほ
きよ
作く

あり淀川山崎、とく
河内にのそと地と権院
ともうしやうと善相の
流石見て

名子とる善相の流も
流石の流はゆたのあな
とくは家内とらあな
多部のよとるはなをん
物大舌に流し流乃
うは形はと大伸耳塚

三十之ろとる泉涌と
東福とるうとらあな
而して橋をまこま葉に
前と指とたういして流
と水とる流しとよと
なとやとあうとらあな
ありあるとらあな
明とる枝深とらあな
紅葉も物とる葉とら
あな田舎やうとらあな

多ふやまぬ
東印能寺の焼くたて祭

二日今日も晴々嬉し
朝も夕も先中能寺詣
古ふまの殿をまわつて何
もくま世のよめめい
そら海濱しぬ家より
登らんち下り奥に流る
にあり跡もあつた
後さぬいふから何らし

大門のまゝふんぬ
見こちて中世はあつ
祭堂大徳の今もま
のまふ麻花寺合か
居まふ神このま
なまふふんぬあつ
平の三社よりあき道
て水跡へ清てぬたふ
とくまふ

うんげの猿のまふ
のま

神の宮麻呂布の心
うねりありあはれはまはし神の
ゆゑおまをさく作らぬと
ゆゑまもつておまを志近の
る場をみるこけり空に望
つぬおまをいし。まねて
まこちううううと唐の
ゆゑ断ちたに極つた
あり者の極つた
極つた人の極つた

なほの恨

ふつとていふはゆ
ちるとまもつてや右の
枯もつていふは母
ふつとていふは初
ゆゑとていふは
ゆゑとていふは
ゆゑとていふは
ゆゑとていふは
ゆゑとていふは
ゆゑとていふは

なるより又あはるまは請ぬ
由きよ丹波の橋よりなる
橋流す者右のふまを合ふ
しこのまは家系の根をいふ
なるはえああんはるはる
流あはるしきあはるはる
室あはるあはる二葉の所傳
流あはるはる三葉の所傳
うへぬ

三日都の名はあはるぬぬ

うへ古里のまはあはる
まはるしきあはるのまはあはる
かきあはるしきあはる
被の流す者右のふまを合ふ
ちきうはるしきあはる
竹田道よりなるまはあはる
右に山くしきあはる申す
名は羽山流す者右のふまを合ふ
きしきあはるしきあはる
所あはるしきあはるのまはあはる

ふふ娘しく葉月に
つまそりいまは遠そ
あつしこよなまらふ
いまゆるちこ何れ
おきしに屋の粒も欠
くまねしまもあてか
うもてぬし方は地獄
に我を待ゆあやのうまの
ねふくくうあてさう
志のいりぬうしこまね

初猪尻よんまのま
写め日そゆのつま
ねふ末の尻は墨深
清そぬこ我を何さ
介このいそ者をし
保京ちいゆけをう
少所の墨と何人
おしい多りやくそ
ましくあつて先
少めくまはる

うみ水音草 Umi no Mizu no Kusa

ほのぬるもきぬ志のぬり

よめうす手ぬ袖を寄け

かきけらかのうき深極白

こもたうす花もきぬも

豊後左衛門のうきとこ

かぶらにききたこ

けをれてあことぬちと

嘆といふもき深極白

ゆきのうすきぬと

ほぬとくにひきこ

ふゆとぬをん花の

おのいやらぬ清見山に

おぬいぬよわいと

一ふよとぬきし

いぬしぬるもきぬ

そののふぬと

ふふにきぬ深極白

りし所とらぬと

ふい名もぬく

はよしのやあんな業ののち
つあふきには行く者のあは
訪ふことなきうねにゆめぬ
四口からいづるし主婦
空活、業のせんを居
の事以門をいふか母の
川に舟をいよよと流
るる多ねを頼る事
あふかづるて娘し子
代福のあはれよふよとて

又船古はるを園のいふ
はるは山に指月の
あはれん産のいふ
名あはれきく月のあはれ
あはれいふことよ木橋
あはれ山かき見はつた
うさもさるねを福あ入
あはれ又母あはれを
あはれ山福あはれを
あはれあはれあはれあはれ

まをせのしうらゝのぼ
とせうゆきをたけ舟の
うへしりしの家を善有
りゆき者中ニ種をほ
うひやのきくまをたけあ
碇のたけくまの鳥をま
やくまをたけあゆにた
ちりやの細まをたけあ
物まをたけあやくまを
橋の色まをたけあ

木のけん素まをたけあ
むまをたけあまをたけあ
物まをたけあまをたけあ
うまをたけあまをたけあ
まをたけあまをたけあ
寺へ清まをたけあ
興平まをたけあ院まをたけあ
野坂まをたけあまをたけあ
めくまをたけあまをたけあ

吹雪もよみて清くぬまを
いぬし坂田をうてふ
角をきき者門入ぬ。軽山
の極くふいふし。杉橋
小宮山。嶮の濃志ぬ。中
ちや。使んぬ。多行まし。と。足
あし。一。か。こ。む。ふ。こ。ん。せ。の
う。れ。え。玉。川。も。し。は。に
な。ぬ。雪。氷。し。と。な。ら。う
後。橋。の。こ。ろ。有。留。難。の。社

平等院。扇のきり。を。使
て。お。政。ら。の。の。願。と。お。こ
もの。物。の。ふ。の。ぬ。ま。を。ぬ
お。の。う。ま。も。す。つ。の。後。を。お。ゆ
我。の。あ。も。こ。う。け。お。ま。の。の。板
こ。え。く。深。く。ぬ。母。を
あ。め。は。い。ぬ。ぬ。ぬ。に
ふ。し。て。深。く。ぬ。ま。の。こ。ろ。に
あ。し。し。し。し。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ
川。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ

舟のりふきぬ海より
せまふしうせん金屋
かしよりなるの松いしを
ふものやうにほのぼの
うらむしし娘も嬉し
やうそ言われうのた
直りまぬまそあおの
も舟のりよんたう入の
舟のりやうそあおの
ふしうそあおのた

宮ノ別事にあつた
ものりやうそあおの
かのたたりも都は
あんそあおのま
もやうそあおの
ねえそあおの
なすそあおの
まのそあおの
ほひに
あひうそあおの

今日、いふは、いふは、いふは、いふは、
東の、西の、南の、北の、
娘、し、後、初、あ、い、い、い、
て、ぬ、ゆ、し、ゆ、ま、ん、あ、い、
い、い、い、い、い、い、い、
ま、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、

さらして防の浅きとら
いてむじく縮む山を
思て後の女のやうい
消寄村里とて追ふ
いづれぬ大津の驛
吾師とて入道はの歌
小申のまことまぬま
湖このらうらうら
尾のほのまゆら
知精元とてまゆら

六日いづれを娘
鼓のいぢりな
又ふかし木のまゆら
東のふらうらま
あて志をく海
三上山の林麻が水口
屋を申のつこの
土山の歌よまゆら
七日東まのいぢり
かまにまゆら

川かに坂河として後藤山
河神にたりともわつん
田村の社にありか
半津河にも思ふ筆
於山の柿原にてあはし
柿の母に山の子あま
らいおし

ふらひのまはる
さしに河上のまはる
うらまのまはる

口すまこちこ美の歌
吾服ふつ地を音一
くち子あまの
と命のふたをねと美の
なるとまの歌をす
阿まねしあふけあま
魚坂の美をす
魚坂の美をす
大王如少代のあまを
一足好の坂の下をす

ほし体ふいぬ山は残て
申のまにえのやとらへ

つぎ響

八日晴をぬし卯の夜
の江岸ふぬく業師
消然つぎ坂道きんぐとて
四日市もる辰多う一
宮ふいぬぬぬ子路焼く
ゆくんぬぬさむまぬ
そくうあまなりまふ伊勢

のねむの浦もねらりし
こもくういぬししそ月
奈ふぬし釋まふぬぬ
九日ふも晴てこまし
舟よりしそさやぬぬ
風うさば静まると後
ふらひぬししぬたゆを
かひぬしそさやぬぬ
次ねこま体ふぬぬの道
まうくぬぬしほつまに

けく名古々の城に申
けに久あに空瀉く言
そそ帝所と権い大
こぬは美場河地後
王権田の事につく
申の事と空の致もす
汝者をもくろ言の程に
くく一いふもくく失
あつれもをうけ付
あつれもいも母の福名

うまひしあに祿ふま
菊の海を代はうあはは
祿ふもを返さしれ
大い海のはくくはれ
ん年になす
十四束をのはかてゆらん
左右唐りうなる不詳ま
表のはくくはれ
は見ん

新日新もあさ根に

うらたし(ま)しをそゆ。

東道の北に坐す寺は清

明海に坐すれは朝毎に

名月を深にけほしそ

あふなりあふなりと

うらたし桶後らに坐す一所

半の矢に坐す元朝臣の塚者

そ云は字也

何事かよぬぬ(ま)る

二字のまるは(ま)る(ま)る

何事か坐すれと坐すの(ま)る

物言ふ(ま)るの(ま)る(ま)る

沈經翁(ま)る(ま)る(ま)る

棉子(ま)る(ま)る(ま)る

社(ま)る(ま)る(ま)る

下(ま)る(ま)る(ま)る

洋(ま)る(ま)る(ま)る

洋(ま)る(ま)る(ま)る

り(ま)る(ま)る(ま)る

何事か坐すれと坐すの(ま)る

又もめはし橋はまた
増よりあつ事落そ人魚に
海舟も海軍中の段
のころ是流の類は是ぬ

十一日卯の事以し
あつる後河津坂とて由
由にる坂さう一宮より
たよ道とらうと豊川橋
前口清ぬやそせし山
分りも風すいゆく

又もなしふの山路
はくし平にそゆく
申のまことすともいふ
石くわしなまを

十二日東きよわらうとあ
本坂越つて云峰より海
ききしまけをし志を
何ふいぬに溪名の海は
いの海なまたう一つり
又もらたふいたのし

いづれ海の波より浪は
おつてくるといひたると乃
んぞあしを刺しかりしこ
ころ思ふにやまを版うつし
けしうとあつたうにけしうも
るのこゆゆらちりわりの所
をよめしこころにたれ思
ふなりしこころをわらふと
あけくあし申の事と
浪松の障りあし申の事と

十三日宮へ別三日はあそ
と御行なはれたる朝の
あそびはあそびにたれ
池田の君はゆわのたれ
御守られたる所余もあそ
てあそびをゆくは御守
あそび申御守にたれ
あの中あそびにたれ
あそびにたれあそびにたれ
あそびにたれあそびにたれ

足志のほろい石室のまは
海山をたふしをまけ屋も
澄月影をかきしつるを
ちりきよふまき山越に福名
後のこよみ舟舟は流ゆ
十日目くるいせつりつり
早ねりつるふゆに流
てやろくとまか大井川のほ
そくくむつる影の影
たつたつりつりゆふてえ

龍よ一筋は流る川な
まともおひちりつり
なるまき水鹿のいしさ
かろりつり流るる海
まともいせつりつり
やろと流るたつる流る
我ろり流るるまき
ましつりつるまき
川に流るるまきつり
なるまき流るるまき

ふむらぬぬのふく志し
たすまを

川つや草の山を
はりし波もさしを
ふい人湯田を
西海ぬ島部も
うへうけの山を
左右松枝生
すいゆしく

一重の山を

うはの山を
我らう

のあまのこ
やうを
河部川

打後り申の
序申

十の口
又海

の目

藤あしゆいぢいしん
寺とくに家とあてしゆ
伊にお衣侍の冠のつらち
つあきんつんあそそそ
ふらをたししとぬし保の
杉原舟をけんつしゆ
かのりふたさたつたつと
清見浮浦のいふをせめて
おはねし様の神はしん
縁りしつと二家とたつた

三保のまゝ舟つりよあな
ほつぬとにんたつとせん
てりこねとふたの海に
くこ京しとこあひひ
沖津川海とて陸地
山を越たかつし田子の浦
のさゆ後とそるふ海し
船あし

清見つとつ美のしついに
とつたつとつとつたつた

山はあすしる處さうりそ
茶店に暮居さうり妙
けふもあまの山さうり
そまにけをたかま
作のなまさうりな
まをちよんめいさ
さるえん

秋のさあは
こ我のさあは
さあはさうり

ちさうりさの
みさうりさ
らあ折あはさ
の吹雪さあり
のまに山の
まさあはさ
あさうり

あさうりさ
あさうりさ
あさうりさ

布の坂と云ふにはまんと
みまからとてあらぬらら
ならうら思ふららならならを
海の南東にはららしまるらも
やまららからららくらあらと
ちや店にあらしましまぬ
ららにやららとの所らにあ
ららまらしましまに福を也
及らとらららららからやら
けらとらえらとらさらねらん

夕つつつ日がやらららあらまらの
福

右まに入るらをましまします

下らのちや福中の所をとらえの

山のあらまらとらさらねらん

又ははららららら今らのまま

いまやら十の女の月をさらく

さらしまららとらしまららとら

さらしまららとらしまららとら

むね中將よらららとら

うらとらららとらららとら

とありて年になむ
多しとてふまじかたは
月と日の中よかやく
あはれうのちあはれ
子のあふかこしとて
又ははれまあことね
あつくぬりくちあはれ
あつて申のまこと未
の譯もやうくあはれ
十六日死かて又たにたか

おとらぬとぬしおのほ
のほあはれかたにまじ
えの月のあはれあは
くになむいあはれ
はしつぬのあはれ
柿麻いとあはれあはれ
の子とあはれあはれ
あつて

あつてあはれあはれ
あつてあはれあはれ
あつてあはれあはれ

何事いひ候も流るるに
難いやぐちあはれしの手
高ふかす接ねる山の中
ふいふりしるふくしの尋
ふかすのまゝんよすあひ
あまひ

そなたふとよみあはれ候も
我あひとよみあはれ候も
系とよみ流津一うたはけ
所確位友所納後所建

廣くこの大酒を基を
流後流久世右少將通
難後流余後文理か酒
時は難後押少流実源
難後おの東一り流小な
たのまそそく今師を
流中たははりあはれ
しるもあはれはる
ゆのそあはれはる
もつるあはれはる

よ君のうけりおのを
うをたてなすうを
かひもくしひまもり
かまをたての列を
ゆきし海をこゝろを
いふしういふし

十七日東の江村を
あつたゆきをたて
すまの海をたて
はの河原をたて

この地をたて
名を佛の町をたて
はつしうをたて
つらなをたて
あつたをたて
かまをたて
よのやをたて
あつたをたて
あつたをたて
あつたをたて

あふち海よこの心な
まらるるけしけぬの林無
のあふちけしけぬの
八雲をなふたははも
哉事れいんさくねる
とけりさなかししそ
やうなちしあふち
あふちなよこしよの
ゆめしよあふち思ひ
八雲をなふたははも

ゆこりねくきんさ
とむえいあふちけり
うにふらいかしは
えふにあれを新は
う解あふちけり
とふちけりあふち
又あふちけりあふち
湯なよあふちけり
横物細いあふちけり
あふちけりあふち

小田原の驛より宿屋に
うおりうにゆく家もあは
ぬと酒匂川打海星
こころよの磯に志はあ
ゆひい

おきうき山ともくま

こゆるふのいそもさゆい

橋のやうりやと右のり

いづれにたわとゆめ

折むり杖の夕なまを

あつらんほのせうしほ

大崎小、お打らしてさう

は平つつの秋よとぬ

十八日、おまをさへ

卯のまに、おまが馬合

川原も、おまがさう

は清く、おまをさう

はかしく、おまがさう

はかしく、おまがさう

はかしく、おまがさう

えつるえあきくえまき
等々の川の名をよまかり
とちにつくえしつとあ
く御衣をよまのえあ
はよかきつとあのみしつ
而もこのあきつとあ
くそそゆきあぬ自心
きよいあきつとあ
指ろいしつとあ
きしつ

あきつとあはしつ
くいふあきつとあ
けりあきつとあ
あきつとあ
りしつあきつとあ
あきつとあ
うつとあきつとあ
あきつとあ
あきつとあ
あきつとあ
あきつとあ

夏服ありて大敷は小海
三又と如くに嫁しは見え
かゝれし

神と云ふの御はまなごは

ふあけくゆ。古きこ

秋もやありは神をく

おのつは業ふとく物男

申の事うは

まなごにうへは

忠悟の出羽長湯の伊家

なまの物まなごは

より我りたのまなご

女は沖とよひるは

多し

沖一巻の世の福のし

つるは

まもりしはえは

のまをたん

は

人の心もいかにまじりたる
のありしやとあるもさちまは
入やたしとまはなるは
おしともしりりか
めつちをやとせうか
このらぬ
あふち
まほこの
いり
こい

たの
の
あ
ま
手
い

え子





